

## 福佐山地に於ける山名の原義一二に就いて

小林 悟 一 郎

春の陽に萌ゆるふくよかな草山や、夕日春く  
麓野の農夫が一日の勞を慰むるにふさはしい柴  
の山など、何れもその懐に守り育てられて來た  
里人が爐邊青燈の下には、うるはしい山の傳説

が語り傳へられてゐる。幾山谷を訪ねて來た旅  
の地理學徒にも一つの慰めとして聞かされるの  
である。併し地の理學者とまで成り果てた悲し  
さには、傳説を傳説として聞捨られぬ悶えはあ  
る。本職のデータを整理しての餘暇に山里の傳  
説から、さては奇妙な山の名の起りを尋ぬるの  
も、却て研究旅行に於ける一つの手ずさみであ  
り餘興である。本篇は即ちその餘興のかき寄せ  
に過ぎぬ。系統もなく論調を構はず、只讀者の  
貴重な研究餘暇の高讀と指導とを祈りつゝ、發表

する。但し余輩に負ふ所も尠くないが、獨斷を  
進めた點もある、茲に先輩と讀者に謝する次第  
である。

## 一、山名に於けるフル

本山地の盟主たる背振山は、肥前と筑前の堺  
に於いて一〇五五米に達する。全筑紫山脈中  
も火山を除けば最も高いもので、福岡佐賀より  
の登山者も少くないが、古來より附近の靈山と  
されてゐて、山上には辨財天を祀る。榮西も登  
り、尙古くは性空(後に書寫に住みし上人)が住  
持したこともあると傳へる。爲めに山名も辨財  
天によつて起原を説かれる。即ち辨財天唐より  
東方へ龍馬を御して飛翔し來ます時、この山上  
に龍馬を止めて四望された。その折龍馬が身振

るひをした。即ち背を振つた爲めにセフリとは名付けたのであるといふ。けれどもフリといふ語尾を持つた山名が、この山地には他に二つある。その一つは領巾振(褶振)山である。

唐津灣の青波と白濱とを虹ノ松原の彼方に見下す彼自身の姿も亦美しいものである。彼が美姫佐用媛の傳説を負ふこともふさはしい。人も知る通りであるが、肥前風土記の原文を引けば

褶振峰 在郡東峯家  
名曰褶振峯

大伴狹手彦連發船渡任那之時、弟日姫子登此、用褶振招、因名褶峯、然弟日姫子、與狹手彦連相分經五日之後、有人每夜來、與婦共寢、至曉早歸、容止形貌似狹手彦、婦抱其怪、不得忍默、竊用緘麻繫其人欄、隨麻尋往到此峯頭之沼邊、有寢蛇、身人而沈沼底、頭蛇而臥沼邊、忽化爲人、即謬云、志努波羅能意登比賣能古裏佐比賣由母爲禰耳幸志太夜伊幣爾久太佐幸也、于時弟日姫子之從女、走告親族、親族發衆昇而看之蛇並弟日姫子並亡不存、於茲見其沼底、但有人屍、各謂弟日女子之骨、即就此峯南造墓治置、其墓見在、即ち領巾を振りしに因ると説く。但しこの傳説の幾許が事實に出づるものかは問題である。吉

福佐山地に於ける山名の原義一二に就いて

田東伍氏は(地名辭書地名傳説の部)伊豫の日振島と共に、烽火の疑念を抱く旨述べてゐる。けれども語源に互る具體的なことはまだ示してゐなかつた。又此の山は鏡山ともいふが、風土記にも「鏡の渡」を記載してゐるので、カガミも古くから稱せられてゐたかと思ふ。鏡山の原義及ヒレの考證は今此處に累述を省くが、ヒレフルなる稱呼は韓來の人に呼ばれたものであつて、古くからあつたものと思ふ。

も一つは大振山といふ低い山である。之はあまり人に知られぬ山で、省線原田驛の東方なる一〇〇米にも達せぬ、丘と呼ぶべきものである。以上三つの山名を比較して得る暗示は、「振」の意以外の語意がありはせぬかといふことである。

韓にて火を *Pyre* といふので、フルは火の意を持つてゐまいかとも考へられる。栗田博士は常陸風土記の筑波郡の條に、福慈山とあれば富士もフル(火)とクシ(奇)との連れるものとされて

ゐる。けれどもこの三者は共に火山ではない。

褶振山は橄欖岩・玄武岩を頂上に戴き、基磐は花崗岩よりなるビユートであり、背振は今の處ベグマタイトとミクログラニットの浸蝕差によるモナドノツクと解されるし、大振山は花崗岩（主に黒雲母巨唱）丘である。若し火と呼ばゞ、それは人工の火であらねばならぬ。烽としては褶振が地位上候補されるのみで、背振と大振とは極めて疑はしいのである。併し背振では雨乞の祈願に火を焚くことが近時まで行はれてゐたが、その何時頃からのものか調査は困難である。恐らく山名以前のものであるまいと思ふ。フルを火の意味としては三山に共通しない。殊に大振は烽でも祈火でも、また火山でもない。さて筆者の想定する所を述べれば、フル・フリ即ち山であらうと考ゆるのである。

従來豊後あたりを中心として西日本に分布するムレ（牟禮）なる山名は、山の意であると言はれてゐる。例へば鼻牟禮、牟禮等であるこの系

統と思はれるものは、耳繩山地（八女郡牟禮）までは尙認められるが、背振山地に於いては不幸にして筆者は探し當てゐない。當山地の山麓乃至は平地にはムレの系統と思はれるムロが分布するが、當山地に入つてはそれさへ殆ど見出し得ない。故にフルは牟禮に當ると見做されるのではなからうかと思つてゐる。而してムレとフル・フリは通ずる様である。ハ行とマ行の相通は至當である。されば兩語は互に正訛の關係があるものと考へる。

余が最近實地踏査の際立寄れる四阿屋宮（佐賀縣三養基郡麓村）神宮三橋氏は、同社の北東隣なる字名をドウコウと言ひ、昔より天然の茶を産すれば、ドウコウは道光にして僧榮西が一名と思はれ、彼が背振に茶を植ふと正史にあるはこの地にあらざやと察せられ、セフリとは往古に當地（風土記に言ふヤム―養父郷）附近より背後の山地を汎稱せしかと思ふと語られたのである。故に筆者は直ちに同地に至り老農に尋

ぬし所、天然茶の現存は否認したが昔良茶の出づることを他村よりの噂に却つて聞きたることはあると言ひ、尙追求せしに往時道光山てふ寺ありしこと及びその所在地を示したのであつた。右の道光山云々の寺に就いては今研究中である而して背振のセがその用字なる背の原意か否かは今直ちに肯定はしないが榮西の植茶の地が今の背振山峯ならずして汎稱背振の内なりしに止まるてふことは納得出来る。三橋氏の見解は筆者のフリ山なる卑考に對する一參照たり得るものかと思へば今茲に掲げるのである。

ムレに就いての從來の考證によれば、古事記雄略の段の阿岐豆野の故事の處の、御歌に「美延斯怒能袁牟漏賀多氣爾志斯布須登……」とある。その袁牟漏が書紀に鳴牟羅とあり、今では小村といふ所に當りその横には山があつてオムロは小山である。此に於いてムロムラは山の意とされてゐる。筆者は茲に古事記のムロが古稱で、紀のムラが新訛であると見る。尙齊明紀

四年に伊麻紀那屢乎武例我禹杯とあるを釋紀に小山之上と用字してゐる。而してこのムレは鮮語とみなされてゐる。現韓に於けるモイ、濟州島に於けるムレ・マル及現朝に於ける地名の旨字の訓マル・モロも同系統と論ぜられる。併しムレが如何なる起原を以つて、山の意に用ひられるに至つたかといふことを論じたものをまだ見ない。今の處ムレは第一義的に山のこととされてゐる。

然るに上述ムレフルの系統と紛らはしき地名辭の一に、フレイムラ(村)がある。而して村の古義を有するフレがムラに至る過程には、ムレもあつたことと思はれる。即ちフの直轉はムであるからである。例へば「群れ」の如きはムルの變化と見られる。

されば山の意のムレと、村ムラとの間には他人の空似以上の關係を疑ふことを許されるならば、當山地山名の振フルと他地方に於けるムレ(牟禮)との關係は村の意のフレと村(ムラ)

との轉訛關係と同一に論ずることは出來まいか。

茲に至つてフレ(村)の語源を尋ねれば、韓に於ける洞の古訓ホル(新訓<sup>ユレ</sup>コル音は<sup>モ</sup>トンホルに忽の音を當てたのが古地名に多い)に通ずるとされてゐる様である。即ち原は谷の意であつた。更に追求するならば、谷中のみを指してゐたか否かを疑ひたい。蒙古語のホロが山谷の意に用ひられる如く、谷底谷中に限られずして山谷・山間・山野を指して、廣範圍に用ひられたものではなかつたか。

直截に私見を述べれば、村の意のフレも、今論ぜる山の意のフル・フリも山谷の意のホルより出で、後者が更にムレ・マルと轉ずると同様に、前者もムレ・ムラ(マルとて村を指すものあり之に就きては別稿を草したき所存なり)と轉移したと思ふ。即ち極言すれば、山名のフルはムレよりも却つて古音であらう。而して之はmが一般に古より新しいとされる多例にも順で

ある。或は又フレの轉ムレの形にて本邦に來りたるものが、更に原音に轉じ反つたとも見られるが、少くともフレがかなり古くから稱せられてゐたことは後述する所にも徴せられることであらう。

## 二、フルの約變

上來山名フルが山の意なるべきことを考へて來たのであるが、更にこのフルの變化促約と思はれるものがある。その最も論ずべきものに九千部山がある。

この山は背振の東方にある岩脈峰で古來背振の別坊としての靈場であつたらしく、彼と等しく辨財天(基養父辨財天様と里人は稱する)を祀る。肥筑の境界問題を惹起したことも背振と變らない。

さて此の九千部なる文字に就きては傳説があつて、今まで起原及原義をその通り信じられて來てゐる。概略を述べると、

天曆年間、附近山麓一帶は引き續く風雨の災ひに苦しめら

れた。その當時背振にゐられた性空上人が法弟に、隆信と呼ぶ若い立派な沙門があつた。庶民の災害に苦しむを見ては、修羅佛鬼道もかくこそ思はれて、一念濟度の熱願が發せられずにはゐられなかつた。茲に法華經一萬部を七週四十九日が間に讀誦祈禱して、風水除難の大願を風天神に立てることになつた。併し筑紫の野、玄海の灘を荒れ狂ふ烈風は、共々にこの峯頭に渦巻いて、沙門が袖も千切れむばかりに吹き捲つた。若い血潮に燃え立つ傑僧も五七日が来る頃は、長の斷食の爲めか、荒ぶ風雨の爲めにか身も心も衰えて行つた。時として墮落を強ふる煩惱を抑制するさへ苦しかつた。併し衆生の悲しみが一僧のこの身で許されることを思ふと、熱願の精進を続けねばならなかつた。愈々あと一週日で滿願といふ宵であつた。今宵はもう九千部目の經卷を手にする迄に、行は進んだ。山の如く積まれた八千九百九十九卷を見る沙門の身には秋の尾花を渡る峯風に打消され勝になつた我が聲の腹れ切つたことと共に、永い苦行を偈げしめられた。『お、これはいけない、また煩惱が起つた、自我が現れた』と自ら鞭打たうとしても、心の弛みが返らない。僅か一部の經卷が五滿になつても誦じ了へない。沙門は更に煩えた。と見れば壇上に一匹の白い小蛇が現はれて、いと愛らしく沙門を眺めてゐるのに氣付いたが、氣付くと直ちに白蛇は消え失せて、時も移さず觀音様か文珠の化身かと疑はれるまでに美しい女が現はれ、怪しく笑みては招くのである。この山の辨財天の來迎かとも

福佐山地に於ける山名の原義一二に就いて

疑つたが、風天への願行に、さる事もあるまじき、魔靈のたはむれか風天の試しかとも思ひ惑ふ。その中にも既に沙門が心は魔女に引かれてゐた。傑僧と呼ばれた隆信沙門も恍惚となつて唱誦をすてた。そして美女は夜な／＼現れた。隆信は愛慾にほだされて行くことを残念にも思つたが、美女の誘惑を斥けることは出来ず、況して讀經を續ける勇氣は更に無かつた遂には民の濟度滿願を待つよりは、美女の現れる時刻の指折に餘念ないのであつた。珠數持つ手には美女の綾羅の袖が纏れるのであつた。そして沙門が魂も精氣も美女に奪れて行つた。

里人は四十九日目の朝は早く、隆信様の滿願だと押登つて來たが、その時は沙門が姿は既に見えず、唯あたりに白骨の散らばるのを見出しただけだつた。

希世の大願も、九仞の山に一簣を缺いで成らなかつた。そして峯頭は永へに荒れて、姫小松さへ生え得なかつた。でも里人は沙門の勞をあはれむで小祠を立て、沙門の願行が法華經九千部にして絶えたので、この山を九千部山といふことになつた。

併しこの傳説に満足してはならぬと思ふ。無論これは里人にとつては懐しい、そして尊い傳説ではあるが、傳説は矢張り傳説である。今探るべきものではないと思ふ。何故ならば、古老

はこの山をクセンプとは呼ばで、クセ、しいふ。ソンの省約とも思へやうが、この山の南西麓に於いては、この一峯のみならず、石谷山と稱される處の九千部の西峯をもクセブと言ふので、深く考へねばならぬ。この條件より推すに、九千部はクセブへの當僱であらうと思ふ。尙肥前風土記——隆信の時代以前——の佐嘉郡の樟樹の條に「朝日之影蔽杵島郡蒲川山暮日之影蔽養父郡草横山也」と見えて、この草の横山と言ふのが位置上九千部山を指すものとされる。之を案ずるとクサは今のクセブのクセに通ずるから、天曆以前よりクセに近い語原があつたことは、信ずることが出來様と思ふ。或は草横山が撫の誤といふことにも證明が出來るに至れば、尙クセブの音に近接して來るであらう。

而してこのクセブといふのはクセとブとに分つべく、そのブは上述せるフル系の約語かと思はれるのである。フを濁つたものであり、ムレのムに轉移する一過程ではあるまいか。そしてクセは、古志とか久志とかの地名と通じ、朝語<sup>モト</sup>にも依縁あるらしいと見てゐるが、風土記の用字を引き來れば、草——クサの系統の古語と覺しきクシ（フシはその通轉せるものと思つてゐる）と見ることも出来る。栗をクジといふ方言もあるが、このクジはクシより來つて、更に一轉してクリとなつたと思ふ。即ち柴の意から篠栗を呼ぶ固有名詞となり、更に柴全般を指すに至つたことであらう。

クセを草に擬すれば、クセブは草生山にして、ブに山の意なきにあらざやとも考へられるが、生はブ——フルに比すれば後代の出語かと思はれるし、且つ生の原はフルモトに依るものと信じてゐる。矢張りクセブはクセ山である。

右の如く述べて來ると、穗觸峯・穗日二上・穗日高千穂・久志布流多氣、等の紀記の文に想到するがやがて何等かの關係あるものと思ふ。彼の九重山も豊後風土記直入郡に救草峯とある。このクタミは郷名にもあつて、同書に梟泉ウツクミの約轉

としてある。之は些か疑はしいが、クタミからクサミな原語は想ふことが可能である。そして久住も原とクスミと訓みはしなかつたかと思ふクサミ・クスミは即ちクシムと同じくクセブに通じ、ミはムレの約と見られる。久住を音讀したため九重とも當用されるに至り、クシフと通ずるは偶然でなかつたか。但し久住と九重とは異なる峯頭を呼んでゐる。

尙臆斷を許されるならば背振とクセフリ（九千部）との關係を疑ふことが出來ると思ふ。

次ぎには荒平山といふのが、早良郡と、神崎郡とにある。之も或ひは韓語流に「下の山」の意かも知れぬ。その他では大場・大葉・十坊（以上糸島郡）笛ノ岳（東松浦郡）帯隈（佐賀郡）等の諸山名がある。大場・大葉のバは確にフレの約轉と見る。筆者地球（第十六卷第六號）の拙論中に述べたが如き概則を案ずると、その轉訛は相同中最も容易なる確率を有する。即ち Obuyama なるブのウ韻は、山のヤのア韻に牽制されたと

なつたと見える。聚落名としての大庭・大葉のバもフレ（村）と解し得るであらう。場所のバ、庭の訓バはニハに出づと言ふ古説はこの場合取るに及ばぬと思ふ。大バは大村（聚落に於いて）大山（山名）とが解されぬ。フレ（村）・フル（山）・フ（生）・バ（庭・場）は互に關聯するのと考へる。

十坊のボもブのウ韻が一般法則により、後來オ韻に轉じたものと見たい。かの山峯を指すホ（穂・峯）も、やがてはフルに出てたものと思ふ。筑紫の坂があつたであらう基山（坊中山）に、肥の君が祀つたといふ荒穂宮（今は山下の宮浦にある）のホも山のことであつて、荒穂は即ち坊中山を指すものと思ふ。風土記に言ふ龜猛神といふのも、荒穂の語原とされてゐるが、筆者に言はしむればアラフルとその山を呼び、山麓にツクシと言ふ地名ありたればこそ、風土記の故説は生れたであらうと思ふ。但しアラフルからアラホとなつたであらうことは同理にして、却つて今はホの前身がフルであつた證明とはなら

ぬかと思つてゐるわけである。尙ホと尾・上との關係などは、「地球」上の投稿「地名の地理學的考察と其一例」中の地形詞の部を參照して頂き度い。

笛ノ岳もフレノタケで、山の意の二つの語が時代別によつて疊用されたものであつて、ラ行からア行に通訛したに過ぎぬ。帯限山のオブはオフル(オ山)が原語と察してゐる。かく觀じて來れば「麓」の邦訓「フモト」の語に於けるフにも山の意あることを知る。従來の「踏みもと」の約とする考は不當である。フモトは必ずや山本(フルー山・ミト (mit) 一 下) でなからねばならぬ。南九州に於いて「フモト」と言ひて本村の義とし、府本のことと説かれてゐるのも、フル(村)本と解することが出来るであらう。

### 三、タレとトル

福岡縣早良郡と糸島郡の堺に長垂山といふのがある。之は字義によつて、背振山列の一支脈が長く走下してこの山に至る故に、長垂と言ふ

と考へることは些か早計と思ふ。

某軍記にながとれ山と言ふのが見えてゐた、後人は別の山とする人もある様であるが、余は地位上この山と見てゐる。一時はとがとの誤りかと考へたが、併し直ちにさう信ずるは輕擧と思ふ。トルは却つて古稱でないか。

それから當山地にはタカトリ、高取―神崎・佐賀・小城の各一及鷹取―三養基二といふ山が今見出した所で五つある。共に當山地の南界斷層線崖の上にある。鷹狩のある山とのみは取り難いと思ふ。直言すればこのタカトリのトリは共通する所の原義があつて、前述フルの如き解釋を下すことは不可能であらうか。而して長垂のタレも之に通ずるのでないかと思ふのである。殊に上述した如くとれなる古稱ありしかと思はれるに於いてをやである。當山地ではないが、近くには多良岳があつて、長垂のタレに似てゐて之も同系統かと思はれる。

轉語言又は言は平地の意として本邦にも地名

としてあることは諸氏の述べる通りであるが、朝鮮には慶尙と全羅の堺に近く頭留山(智異山)といふのがある。之から見ると韓に於いて山に用ひたでないかと疑はれる。即ち平地の意のツルと異なる系統の類似語があると見られる。百濟の高山縣を難等良縣ともしてある。そして等良は山に當てたかと思はれる。山峯兀立する濟州島を度樂・耽羅・吐羅等と重つたことは周知であらう。若しかくしてツル・タラといふ韓語が山であることが確證されるならば、上記諸山名のトル・タレ・タラも韓語を以つて解くことが出来やう。

又鷄林類事には石日突とある。突の韓音は

○昭和七年十二月二十八日陸地測量部出版地圖目錄(二)

- |           |    |       |    |     |    |   |    |    |    |   |     |    |    |      |    |    |    |   |    |      |    |   |    |      |    |      |    |     |    |      |    |     |    |      |    |       |    |   |    |       |    |   |     |       |    |
|-----------|----|-------|----|-----|----|---|----|----|----|---|-----|----|----|------|----|----|----|---|----|------|----|---|----|------|----|------|----|-----|----|------|----|-----|----|------|----|-------|----|---|----|-------|----|---|-----|-------|----|
| 二萬五千分一地形圖 | 修正 | 宇都宮近傍 | 一號 | 喜連川 | 一面 | 同 | 七號 | 氏家 | 一面 | 同 | 十九號 | 栃木 | 一面 | 横濱近傍 | 二號 | 穴守 | 一面 | 同 | 五號 | 横濱東部 | 一面 | 同 | 八號 | 横濱西部 | 一面 | 高田近傍 | 六號 | 眞海濱 | 一面 | 若松近傍 | 三號 | 猪苗代 | 一面 | 京都近傍 | 六號 | 京都東北部 | 一面 | 同 | 十號 | 京都西北部 | 一面 | 同 | 十一號 | 京都西南部 | 一面 |
|-----------|----|-------|----|-----|----|---|----|----|----|---|-----|----|----|------|----|----|----|---|----|------|----|---|----|------|----|------|----|-----|----|------|----|-----|----|------|----|-------|----|---|----|-------|----|---|-----|-------|----|

である。或は之れに基くやも分らぬ。臆斷を許されるならば、ツル(頭流)チリ(智異)トレ(長とれ)トル(高取)タラ(多良)タレ(長垂)といふ山名詞は、第一原義が石であつた言の流れで、後に石山を呼ぶものとなり、山を指すに至つたのではないかと思ふ。即ち原音はtorであらう。或はフレ・トル共に野山を指かも知れないが若しフレが、草野など平らか乃至は滑らかな斜面の山を呼び、タレ・トルが石多き山を呼んだものであるまいかと考へるけれども、他地方に互つての調査の結果を後日發表したいと思ふ。讀者幸に叱正を垂れ給へと祈る。(完)